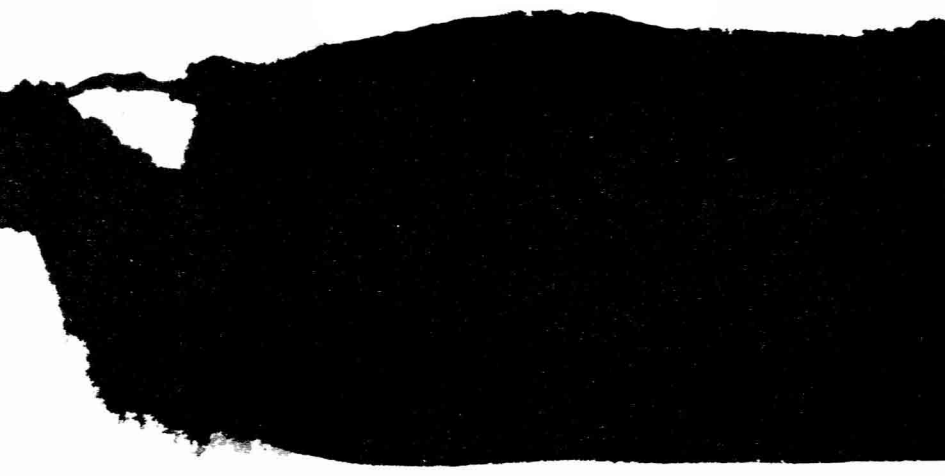


海辺で 三木 卓

海辺で 三木 卓



講談社

海^{うみ}辺^べで

一九八四年四月二十日 第一刷発行

著者——三木 卓

© Taku Miki 1984, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三—三—二 郵便番号二三 電話東京〇—九四—三三 (大代表) 振替東京—五〇〇〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

春

風 犬 島 オルゴール 石
朝 アメフラシ 電気屋

夏

ロケ日和 猫 三匹の犬 終
茸 梅雨あけ 七月三十一日
天使たち 声 蛾 ベッコウ
ヒノベ

秋

対面 瓦斯 土地 夕方 漁港

散歩・A カワハギ 羽化 映画

散歩・B 帆 短日

133

冬

夜明け 電話 オキテ 塚 月蝕

家 ジャム 小事件いくつか 若布

雪 春——または女たち 狸

205

装幀 大沢昌助

海
辺
で

春

風

いったんしまいこんだ石油ストーヴをとり出し、からだをあたためながら本を読む。灯火がま
るく照し出す光の輪のなかに、本と、わたしの逆むけの絶えることのない指が五本、ある。

強風がたえまなく吹きつけている。今日は日中、よく晴れていたのに風は強く、波は荒かつ
た。食パンと野菜の入ったズツクの袋を肩にかついで海沿いの道があるいたが、舗装された道路
もまた、防潮堤のコンクリートをこえてほとばしる波の飛沫のために、ところどころ黒く濡れて
いた。海からの風は陸へ吹きつけてその道路をこえ、すぐそばまで迫っている丘をかけのぼって
いく。丘に密生した低木は潮風にめくりあげられている姿をはっきりと見せながらざわめいてい
た。

風の強い日は多い。わたしの歩いた海沿いの道には、塀があり庭のあるいくつかの二階家が立
ちならんでいるが、それにみな、灯火がつくのは、夏の数週間だけのことと聞いた。その主のい
ない閉された庭には、春の淡い色をした木の花が咲いているが、だれも見ずともなく強風を浴び

て花を散らしている。

そのひとつの塀のなかを不法法にものぞきこんでみた。すると春の草は生いしげっていたが、塀にかこまれて行き場がないままにふりつもった去年の落葉が褐色の層をそこにつくっていた。

はなれて、ヨットハーバーのそばを通りぬける。このヨットハーバーの隣りのアパートがわたしの部屋のある建物である。ここには、ふだん陸に揚げておくヨットの置き場があつて、台の上に固定されたヨットがずらっとならんでいる。〈神々の休息〉ヘオーディンヘコーラル・リーフといったしやれた名がついているヨットの帆索が風をうけて、いっせいに、バタバタと鳴っている。風が強くなるとその音は高く強くなる。深夜、この艇置場の脇を通っていくときそれがはげしく鳴っていると、わびしい。

今、やや時期遅れの寒さが、ぶりかえしてきているところだ、とラジオはいつていた。本当に寒くなった。今年の春はおそい。この分だとあまり暑くない夏がやってくるのかもしれない。

本を読むのをやめて顔をあげる。なに、もう先刻から強い風の音が気になって、同じところをいくらくりかえして読んでも意味がとれなくなってしまうているのだ。光の輪の支配をのがれて、くらがりの方へあるいていき、窓のそばに立ってみた。

闇夜である。丘の木々の上にいくつかの惑星が集中して光っている。あれは木星・土星・火星だ。今年の三月は惑星が直列する形になったが、これはその直後の姿だ。

今はまっくらで見えないが、部屋と道路をはさんで対峙する形になっている丘は、この道路を

通すためか削られていて、地層を斜めに走らせた崖になっている。その崖の上部には、ハトが五羽、営巢している。今、風は鳴りながらかれらの巢を揺すぶり、頂上へ消えていつているはずである。

崖の直下はせまい雑草原になっている。今は昨年の芒の枯穂が淡い褐色のまま一面につっ立っていてそこを埋めている。やがては下から新緑が萌え出して来、かれらをひきずり倒してとって代るはずだ。が、季節はまだそこまではいつていない。風は、枯穂を髪をかきむしるように扱いながら走る。電線がうなる。波がとどろく。隣りのヨットハーバーの帆索の鳴るパタパタという合唱も今はここまできてくる。あの帆柱のひとつひとつの頂点には、風向計がついているが、今、それはせわしく位置を変えて、主のいない操縦室に情報を送りつつづけているはずである。

部屋のある建物は七階だてで部屋数は五十四。にもかかわらず、今いるのは、せいぜい数人でしかない。いや今夜在室するのはわたしだけであるかもしれない。そのわたしは今、スタンドのあたりをひとつだけつけて本を読んでいる。

その光の輪だけがこの建物にともっているあたりであとはどの窓も闇だろうから、風は、このあたりを吹き消せばそれでいい。空は依然として晴れていて今屋上にあがれば、銀河の帯がなだれおちるさまが認められるかもしれないが、風は闇を思うがままに支配している。そのとどろきは、わたしの中の古いヒトの記憶をゆさぶり目ざめさせ、おびえさせる。ここは首都の雑踏と騒音からわずか六十キロしかはなれていないのに。しかもわざわざ、自分の勝手な好みで、本来な

らいなくてもいい、こんなところにいるというのに。

机にもどって坐る。サッシの厚い窓ガラスなのに風圧をうけているのがわかる。そろそろ寝た方がいいと思って本を閉じる。その時石油ストーヴの灼熱した金網の半球が目がいく。

それは若干、芯を上げられすぎていたらしく、金網の半球の上に、ぼうつと焰が立ちのぼっている。といっても不完全燃焼を起すほど過剰な灯油が供給されているわけではないので、悪臭もないし煤も発生していない。ちょうど、ロウソクをともしたときのようにあたりをあかるくしているだけだ。

その焰は、やや震えているが、つまるところ安定している。まるで、外で起っている風のことなど全然知らないし、まして自分が建物によって庇護されているということなど考えたこともない、というように。

そのことがとても印象深いことのように思われ、しばらくながめている。それからボタンを押してストーヴの火を消し、歯をみがいてから寢床のなかに入った。けれども、しばらく寝つくことができない。

翌朝も晴れていた。わたしは少し気温があがって来た十時すぎ、マーガリンを買うために外へ出た。

風は止んでいる。春めいた、恢復期の病人の体力のような、淡いやさしさがあたりにみなぎっている。あたたくはあるが、日陰になっている家の裏、塀の内側の角などには、すでに通りす

ぎていった寒波の名残りがまだ淀んでいるかもしれない。このおだやかな暖気には、それを圧倒し切るだけの力はない。

海沿いの道を、スニーカーをふみしめてゆつくりと歩く。左手に、漁港に隣接する彎曲した浜があらわれてくる。海は昨日とうって變つておだやかである。潮は退きつつあるらしい。

この安らいだ雰囲気をさらに味わいたくて、漁港の向うどなりの磯へ行くことにする。いつも、土地の女たちや老人が、海草を蒐めているところだ。わたしは、潮だまりをのぞいて、イソギンチャクやカニをながめたいと思っている。

しかし、一面にひろがる海蝕台地の、ごつごつした岩礁に、今人はだれもない。おだやかな四月の日光が、岩のでこぼこをくすぐってはすべりおちていく波をきらきらと輝かせているだけである。わたしはかすむ水平線をのぞむ。今、相模湾に三浦半島の側から対しているわけだが、快晴で視界さえよければ、この水平線には伊豆半島の低い山々のつらなりが見え、さらにその背後に富士が大きな姿をあらわすはずである。しかし今日は何も見えない。

足もとは、海からの漂着物が堆積している。今日は、だれかが不要になった青いビニールの親指大の小さな浮袋を沢山捨てたらしくて、内側に空気をはらんでかどのとがっているやつがいっぱいこらっている。

何に使ったものかしらないが、しよのないやつもいるものだ、と漠然と置いて、ふと見直す。ちがう。ビニールの小袋などではない。しゃがんで、よく見る。ちがう。魚の浮袋か。小袋は完全に密閉されている。持ちあげると、袋の下部に付着したなまなましい紐のようなひげが

幾本もぶるぶるとちぢれながら伸びている。水につかっているものは、そのひげが水中であつて重心となり浮袋で浮いてただよっている。

これは、もしかするとカツオノエボシかもしれない。わたしは、図鑑で見たかたちを思い出そうとする。図鑑で見たものは、この浮袋がその名にふさわしくもつと烏帽子に近い形をしていて、そのひげは体長の五、六倍もあるほど長く垂れさがつていたと思う。しかし今ここにあるものは、いずれも、それほど長さのひげは持っていない。とはいえこれがカツオノエボシ乃至その仲間であることはまちがいないところだろう。

思い出す。たしか、このひげは有毒で、うかつにさわると火ぶくれのようなものを起すといわれているはずだ。幼いころに何かの機会にしまれておぼえていた知識である。

それで注意しながら、浮袋だけをもつてつまみあげることにした。なるほどビニールと見たのも当然である。安物のビニールの青そっくりの透けかたをしている。中央上部を熱処理で接着したときの縫合跡のようなものが走っていて、中が空気で張り切ると、そこが不自然に波打って吊れる。吊れたところは青が淡く、吊れないところは濃いまま、というところも、よく似ている。

つまんだものを投げすてて、磯を岩づたいに歩く。すると風景がさらにひらけ、今までわたしの見たものなど、たかがしれていた、ということがわかる。あたり一帯に、おびただしい量のカツオノエボシが打ちあげられているのだ。満潮線と思われるあたりよりもさらに陸寄り、潮上帯に属する地域まで、青いかれらはびっしりと埋めつくしている。